

お題目

南無妙法蓮華經の五字七字

1 お題目をどのように唱えたら よいのですか

(一) 合掌・礼拝

お寺ではご本尊・仏法僧の三宝、家庭においては仏壇のみ前で背すじをのばして正座し、両手をあわせて合掌します。ついで、からだを前にたおし両方のとじをつき、両手のひらを耳の所まであげ、仏のみ足を頂くように、うやうやしく頭をさげて礼拝します。礼拝し終わったのち、もとの姿勢にもどり再び合掌し、静かに心をおちつけます。

(二) 唱題(お題目を) 唱える

心をこめ、ゆつくりと、しかも朗々とした声でお題目を唱えます。南無―妙―法―蓮―華―経―なむ―みよう―はう―れん―げ―きよう、とくり返します。少くとも十分間ぐらいは唱えてください。

早口で唱えたり、どなるように唱えたり、よそ見したり体をゆすつたりするのは正しい唱え方ではありません。両手をしっかり合わせ、左手に数珠をかけ胸もと近くよせて合掌し、眼はご本尊・三宝を見つめつつ一心に素直な気持ちでゆつくり唱えることが大切です。そうすれば、自然に心はおちつきすがすがしくなり、安らかになります。口でお唱えし、身をもってお唱えし、病をなおし健康で明るい毎日がおくれるように祈り、みんなが幸福に生きられるよう念じ、み仏の教えを信じて生活することを心の中で誓い一つお題目をお唱えします。お題目を唱えおわる時には、最後の三回のお題目をさらにゆつくりお唱えします。

(三)合掌・礼拝

お題目を唱えおわったのち、再び(一)のように合掌・礼拝します。

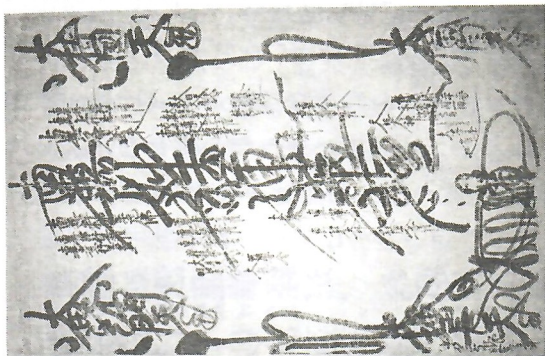
2 お題目とはなんですか

お題目は、妙法蓮華經の題目のことです。
南無妙法蓮華經が、お題目なのです。

お題目は、たんなるお經の名前ではありません。お題目は、お釈迦さまの説かれたすべてのお經の肝心かなめです。もつともすぐれた最高の教えであり、真実の救いを示している妙法蓮華經の心をあらわしたものです。

お題目には、生きとし生けるものを救い導かれているお釈迦さまの限りのない智慧と慈悲の心がこめられています。

お釈迦さまをはじめ、すべてのみ仏はみんな、このお題目を唱えてみ仏になられ



しみ悩みをなくし、み仏のような慈しみの心を授けようとなされているのです。

お題目は、み仏の功德と救いの魂を結晶させた心の宝珠なのです。

たのです。

そこで、お釈迦さまは、長いあいだつまた修行の功德と、仏となつて救い導かれたところをすべであつめられて、お題目という良薬をおつくりになり、み仏の使いである上行菩薩などに託されて、身の病と心の病に苦しみ私たちへのまかせて、苦

3 なぜお題目を唱えるのですか。

お題目を声も惜しまず唱え、妙法蓮華經に説かれた教えを信じ、心にききみ、身につけることによつて、わたしたちは、この身そのままで、み仏とひとしくなれるのです。すべての煩惱のけがれをあらひ浄め、み仏と同じ智慧と慈悲の心を持つことができるからです。

お釈迦さまの語られた本当の教えである妙法蓮華経をすなおに信じ、妙法蓮華経をよりどころとして生きてゆこう、という誓いと祈りをこめて、南無妙法蓮華経とお唱えします。これを、唱題なうだいと申します。

お題目を唱えると、お題目にそなわっているお釈迦さまのつまれたすべての功德を、悟りの心を、そのまま譲り与えられるのです。お題目を唱えることによつて、自分の心のなかにある仏性もよびあらわれ、み仏の心とひとつになって、心安らかにみ仏に生かされて生きることができます。

また、お題目を唱えている人は、いつも、すべてのみ仏によつて守護されるのです。

4 お題目とみ仏とはどちらがうのですか

お題目だいもくはみ仏ぼふを生うんだ親おやです。

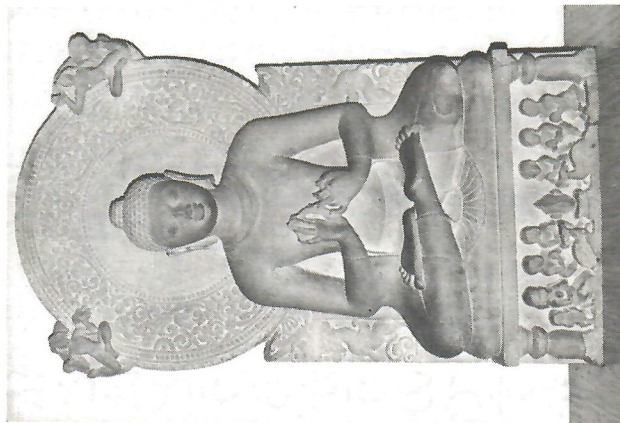
み仏ぼふはお題目だいもくから生うまれた子こです。

ふつうは、み仏が妙法蓮華経を説かれたのだから、お題目もみ仏によつて示されたものと考えられています。たしかに、一面ではその通りです。

しかし、妙法蓮華経があかされていることによつて、み仏の真実の教えを知ることができるようのです。しかも、お釈迦さまをはじめ一切のみ仏は、妙法蓮華経を信じてみ仏になられたのです。妙法蓮華経は、お釈迦さまの父母であり、いろいろなみ仏の親になるのです。すべてのみ仏は、妙法蓮華経を種として生まれ、修行

にはげみ、み仏になることができました。

そこで、お釈迦さまは、自分と同じように妙法蓮華經を信じ、命がけてお題目を唱えて仏になりなさい、と語られているのです。



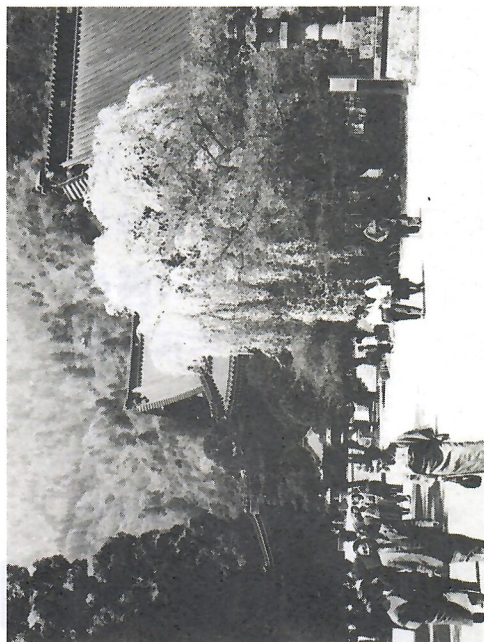
▲初めて教えを説く釈尊の像
(インド・サルナート博物館蔵)

5 南無妙法蓮華經と南無阿弥陀仏とは どうちがうのですか

お題目は私たちの親・お釈迦さまが授けてくださったみ仏になる種です。

この世に縁のない阿弥陀さまを拝んでも救われないのです。

私たちの生きているこの世界で、人間として生まれ、妙法蓮華經を悟られてみ仏となり、ほかならぬわたしたちの救い主であり師であり親となつて、お題目を唱



▲日蓮聖人の魂の棲む身延山

えて仏になりなさいと導いてくださっているのは、お釈迦さま一人です。

このお釈迦さまが信じ悟られたお題目こそ、もつともすぐれた救いの魂であり、仏になる種なのです。

これにたいして、阿弥陀仏はこの世のわたしたちには縁のない仏です。お釈迦さまの子であるわたしたちが親を拝まず、親が仏になれたお題目を唱えないのは、親の恩を忘れた行いでしよう。

6 なぜ日蓮宗のお題目でなければいけないのですか

お釈迦さまと法華経の心を心とし、日蓮聖人の教えにしたがってお題目を唱えているのは日蓮宗だけです。日蓮宗のお題目を唱えて心を浄め幸せと平安にみちた生活をきずいてゆきましよう。

お題目そのものは、誰が唱えても、その功德は同じです。ちょうど梅干を見ただけで口のなかがすっぱくなり、赤ちゃんがなにも知らずにお乳をのむように、一心にすなおにお題目の心をいただくことが大切です。

けれども、これはお題目を自分勝手に唱えたり、お題目を授けられているお釈迦さまや、妙法蓮華經の救いや、お題目を伝えられた日蓮聖人をないがしろにしてよいということではありません。

お題目はお釈迦さまのみ心をあかしたものであり、み仏の救いの心がこめられているものですから、お釈迦さまの救いのこころざしをはなれてお題目を唱えたり、妙法蓮華經の教えに背いてお題目を唱えていても、功德をつむことはできません。かえって、地獄の苦しみにおちることになります。また、お題目はみ仏の使いである上行菩薩によつて、今の世に生きる人びとを救うために伝えられてきたものです。この上行菩薩の自覺にたつて、お題目を唱えるようすすめ、社会ぜんたい

と人びとを救おうとはげまれた日蓮聖人にしたがつて、お題目を唱え、心に仏の種をうえることが、本当にお題目を唱えるということなのです。

自分の欲望を満足させればよいと思つたり、特定の集団の教祖のことばにしたがつてお題目を唱えることは、正しい唱え方ではありません。

創価学会の唱えるお題目は、日蓮聖人を悪しく敬い、お釈迦さまをヌケガラとのしり、仏の種をうえるためではなく、自分の欲をみたすためのものです。これは、お題目にそなわっているお釈迦さまの心を捨てさり、なげ打つてしまっているものですから、あやまった唱え方です。

また、お題目を唱えている新興宗教の中には、一応お釈迦さまをたてまつっている教団もありますが、教祖を大導師とすることによつて、ほんらいの大導師である日蓮聖人にしたがつてお題目を唱える道を閉ざし、妙法蓮華經をこの世に

ひろめ、お題目によって一切のものを救い、幸せと平安をうち立てようとした日蓮聖人の生き方をさしおいて、お題目を唱えているのです。これも、正しい唱え方ではないのです。

これらは、サルをはなれてキモを求め、池にうつった月を本当の月であるかのようになすものです。口でお題目を唱えてはいても、心と身にお題目の功德をきざむことはできません。お題目にもとづいて仏性をよみがえらせ仏の種をうえて、み仏になろうという誓いと目的を失わせてしまうものです。

日蓮宗のお題目は、お釈迦さまの慈しみの心と真実の救いをあかされている妙法蓮華經を一心に信じて唱える正しいお題目です。お題目を口と心と身に唱えるようすすめ、みなともにみ仏の道に入つて、まことの幸せと平和をめざされた日蓮聖人の生き方にしたがって、お題目を心すなおに唱えてゆきましょう。

7 南無妙法蓮華經の文字はどんな

意味と功德をそなえているのですか

南無 という文字は、み仏を敬うときに必ずはじめにのべられる言葉です。命をみ仏にたてまつるという意味で、**歸命**といわれています。命がけで、み仏の教えを信じ行う誓いと願いをあらわしています。み仏を敬う心、み仏の教えを信じ、それに随喜して従つて生きていくこころざしのことです。

妙 の文字は、み仏のつまった功德がすべてそなわっているという意味です。ふつう、妙といえば、不思議なこと、口でいえないほどすぐれていること、

深遠な道理のことをさしています。妙法蓮華經の妙という一字には、お釈迦さまが心をひらいて真実の言葉を語り示されて、私たちの心のなかにそなわっている仏性という仏になれる性質を開発するすぐれた功德がおさめられています。

また、妙には蘇生の功德があります。蘇生とは、よみがえるということです。それは生きる目標を忘れたり失くしている心を改めて、何のために生きるべきか、自分のやるべき仕事は何か、人生の目的はどこにあるのかに目覚めることです。妙とは、苦しみや迷いなど煩惱の毒におかされた心の病をなおし、みなともに幸せになるよう努力して、真実のみ仏の教えを信じてゆくことなのです。

お釈迦さまは、妙法蓮華經を説かれて、み仏の教えを信じなかつたり、そしつたりして長い間悪い心もち、とても救われたいと思われていた人たちをすらい、その悪い心をなおしてみ仏の世界に救い導かれました。それは、重病におかされている者をお題目の良薬でなおしたことを意味していますので、毒を変じて薬とし、

なおしがたい心の病をよくなおしたことを、妙というのです。

こうした不思議ばかり知れない功德をそなえているので、妙法蓮華經ということです。ほかのお経は、これらの功德をそなえていないので、妙という文字はつけられていないのです。

法の文字は、真実の正しい教えという意味で、この世界の救い主であるお釈迦さまの教えをさしています。かぎりない智慧と慈悲をそなえ、永遠に生きて滅することのない生命をもつて、すべての生きとし生けるものを救済し仏の世界に導くことを説きあかしているのは、妙法蓮華經だけです。また、妙法蓮華經は、すべての仏を生んだ親であり、そこから生まれたお釈迦さまが、すべての人の親となって、妙法蓮華經の示す救いの道に導くために語り示された教えでもあります。そこで、妙法蓮華經のことを、「生きとし生けるものがみな仏になる教え」「諸仏の眼目」「真実の仏語」「内典(仏教)の孝經」というのです。

この妙法蓮華経ぜんたいの肝要であり、すべてのお経の頂上にそびえるのが、南無妙法蓮華経なのです。このお題目は、法の肝心かなめであるとともに、妙法蓮華経のなかに輝く慈悲の宝珠です。お題目をお唱えすることは、ほんらいもつべき智慧と慈悲を忘れて、妄想やよこしまな考えにふけつている人間の心に、仏になるための種をうえて、宝珠のごとく明るく輝く精神をもつよう、心をみがくことなのです。

蓮華

の二文字は、妙法をたとえたものです。なぜなら、第一に蓮華は花と実が同時に咲き、みのるからです。これは、信すればただちにそのまま仏になることを意味しています。ほかのお経は、修行をかさねてだんだん仏に近づいていくことと説いていますが、妙法蓮華経は、信することと仏になることが同時なのです。そこで、日蓮聖人も「法華経というのは、手に取ればその手はただちに仏となり、口にお唱えすればその口はそのまま仏である」といわれています。

第二に、蓮華の実は、たいへん寿命が長いのです。泥の中で、何百年、何千年と呼吸してやがて花を咲かせます。蓮は、その長い寿命のことであり、その蓮から咲きでたものが華にあたるのです。これは、蓮が久遠にわたりこの世の人びとに救いをそそぐお釈迦さまの寿命の永遠さをものがたり、そのお釈迦さまがこれまで仮に説いてこられた方便の教えを捨てて真実の心をあかされ妙法蓮華経を説き示されて、今まで救われないとされていたものをぜんぶ救われ、心のなかにある仏性の花を開かせたことを華にたとえたのです。これを日蓮聖人は、「心性の妙蓮たちまち開きたもう」と示されています。

第三に、蓮華は高原の陸地や清水のなかではなく、泥のなかから浄らかな花を咲かせます。悪や不正や苦悩のみちみちている末法の濁った世とそこに生きる人びとの煩惱におおわれた心は泥にまみれているすがたそのものです。このどぶ泥の世間からはなれず逃げずに、泥にまみれながら、清浄に生き、世間と人間の心を浄めてゆく誓いと理想を、蓮華にたとえているのです。

經の一字は、他のお經と同じお經ということではなく、いつさいのお經のなかで第一のお經の王さまという意味です。他のお經の教えは、みな妙法蓮華經というお經におさめられているのです。ちょうど、多くの川が流れこんで大海となるように、妙法蓮華經を読み、お題目をお唱えすれば、すべてのお經を知ったことになるのです。また、星のなかでも太陽が第一であるように、この妙法蓮華經は、くらい世の中や人間の心を照らしたす第一のお經なのです。このように妙法蓮華經はもつとも尊い第一のお經の大王であり、真実を正しくすなおに説きあかした最高のお經なのです。

このもつともすぐれたお經の心をすべてそなえているお題目をお唱えする功德は、はかり知れないほど大きいのです。このことを一念のうちにしっかりと信じ、み仏になる道を歩むことが大切です。たとえ、修行は浅くとも、むずかしいお經の意味がわからなくても、お題目の功德は深いのです。一心に、心すなおにお題目をお唱えすることが、信心の根本なのです。これを唱題修行じやうぎといいます。

法華教箋シリーズ 1 お題目

昭和60年3月21日改訂版三刷発行

著者 石川 教張

編集・発行 日蓮宗新聞社

〒146 東京都大田区池上3-16-9

日蓮宗宗務院第二庁舎

電話03-755-5271

振替 東京3-52147

印刷所 共同印刷株式会社

©日蓮宗新聞社